

セクシユアリテイの病

— 『人間失格』論

石原 久美子

太宰治の小説『人間失格』を読み始めた頃、主人公・大庭葉蔵がしきりに訴える「不安」「不信」「恐怖」というものを、全く理解することができなかった。しかし、小説もクライマックスに來た時、葉蔵の「苦惱」についての告白に出会う。

父が死んだ事を知ってから、自分はいよいよ腑抜けたようになりました。父が、もういない、自分の胸中から一刻も離れなかつたあの懐しくおそろしい存在が、もういない、自分の苦惱の壺がからっぽになつたような気がしました。

この告白から、葉蔵の「苦惱」は父との関係によるものではないか、と私は思い始めた。葉蔵の人生の節目節目に現れ、葉蔵の心からいつも離れなかつた父。葉蔵にとって父の存在がいかに大きかつたかが理解できる。

葉蔵は父のことを「懐しくおそろしい存在」⁽¹⁾だと言う。この父の意味をめぐっては、すでに東郷克美氏や鶴谷壺三氏⁽²⁾によって周到な

分析がなされている。両氏の論は父を中心に分析しているが、私は主人公の葉蔵を中心に据え、葉蔵にとっての父の意味について考えてみたい。葉蔵の内面に抱える父への「苦惱」を。

まず、1「葉蔵と父」では二人の親子関係に迫り、2「葉蔵のセクシユアリテイ」では葉蔵の内面の「苦惱」を解き明かしたい。3「葉蔵と『道化』」では、人間を恐怖する葉蔵が人間につながる手段として選んだ道化の意味を考える。そして、最終的に葉蔵はなぜ「人間失格」の刻印を押されなければならなかつたのか、ということを考えていきたい。

1 葉蔵と父

『人間失格』の葉蔵と父との関係について論じるにあたって、述べておきたい前提がある。この『人間失格』の世界が「家父長制社会」⁽³⁾だということである。日本の家父長制は、明治近代に形成され

た、日本独特の家制度と結びついている。それは、天皇を各家の頂点とする天皇制と一体的で、家長に生殺与奪の支配権がある。『人間失格』の〈第一の手記〉における葉蔵の家についての記述によれば、葉蔵の家は「金持ち」で「十人くらいの家族」に「下男や下女」もいる「田舎の昔気質の家」だった。その中で「末っ子」の葉蔵は、食事の時には「もちろん一番下の座」だったという。葉蔵の家の中で一番発言権があるのは父、次が長兄だということもこの家が家父長制下にあることの強い現れである。

家父長制社会における父子関係について見ていこう。デビット・B・リンは、家父長制における「父親」像の特徴として次の六点を挙げる。

①日本の父親は「権威者」として、また「外部世界の代表者」としての位置づけがある。

②通常、父親は母親よりも子供に及ぼす絶対的権力が大きく、厳格さも母親以上である。

③母親や子供は、今にも父親が機嫌を損じかねないことを知っているから、父親の前では打ち解けず、心からくつろぐことはめったにない。

④父親というのは、家へ訪れた「お客様の存在」である。

⑤男児は特に父親を「懲罰的」だと見ている。

⑥父親は自分の息子に「男らしく」なることを望んでいる。

これを、葉蔵の父と照らしあわせてみよう。葉蔵の父は、「田舎の昔気質」な「金持ち」の家の当主であり(①)、ある政党に属する

「議員」であるため、「月の大半は東京の」「別荘で暮らしている」(④)。したがって、子供と接する度合いも希薄となり、たまの交流が葉蔵には「めずらしいこと」と映る(④)。葉蔵は、そんな「めずらしい父との交流を、〈第一の手記〉において大きく取り上げて書いている。葉蔵は、その父との交流の間、「口ごもってしま」ったりして(③)、父の「不機嫌な顔」や「興ざめ顔」を恐れ(②)、おそるべきものに違いない(⑤)と父のことを恐れていた。そして「父がその海と桜の中学校を」選び(②)、父は前から葉蔵を「高等学校にいれて、末は官吏にするつもり」だった。葉蔵を自分のような立派な「男」にさせたかったのだろう(⑥)。葉蔵の父の描かれ方はまさに家父長制における典型的な「父」の像だと言える。権威者・厳格・懲罰的。葉蔵の言う「懐しくおそろしい存在」の「おそろしい」方の側面は、家父長制社会の父親の姿のことを言っていたのだろう。

では、一方の「懐しい」存在としての父の姿は一体どこから来るものなのだろうか。この「懐しい」と「おそろしい」という背反する言葉の共存が、葉蔵の父への「苦悩」を解き明かす鍵となっていると私は思う。

葉蔵の手記において、「父」と「くに」「故郷」という言葉はほぼ等価で用いられている。ここから「故郷」を懐かしむ想いによる「懐しい」存在としての父の姿が導かれるわけだが、〈母なる故郷〉という言葉があるように、一般には〈故郷＝母〉という図式が

成り立っている。しかし葉蔵にとつては「故郷Ⅱ父」となっているのだ。母の存在は明かされてはいるものの、葉蔵の手記には母に対しての記述は全くなく、葉蔵は母親には無関心だったのでないか。むしろそれに反比例するように、葉蔵は父に執着している。

このような葉蔵の親子関係を理解するにあたって、フロイトのエディプス・コンプレックスの理論を参照してみよう。⁽⁴⁾

幼児は、男根期(三〜五歳頃)に入ると性の区別に目覚め、異性の親に性的な関心を抱くようになる。とくに男の子は、母に対して性欲のきざしを感じ、父を恋敵とみなして父に嫉妬し、父の不在や死を願うようになる。反面彼は父を愛してもいるために、自分の抱いている敵意を苦痛に感じ、またその敵意のせいで父によって処罰されるのではないかと去勢不安を抱くに至る。このような、異性の親に対する愛着、同性の親への敵意、罰せられる不安の三点を中心として発展する観念複合体を、フロイトはエディプス・コンプレックスと命名したのである。そしてこのエディプス・コンプレックスは、人格の構成と欲望の方向づけに基本的な役割を演じる。

このような理論の中で、私が注目したのは次の現れ方である。

なお、このコンプレックスには二種が区別され、①陽性エディプス・コンプレックスでは、男の子が母に愛着して父を憎悪し、女の子が父に愛着して母を憎悪するが、②陰性コンプレックスではこの関係が反対になり、男の子が父に愛着して母を憎み、女の子が母に愛着して父を憎む。①は、正常な幼児の発達

過程で経験されるものであって、男の子はその後父に対する敵意の抑圧を経て父同一化を行い、男性化の道を進んでいく。ところが、②の場合、例えば男の子が女性性に向かう強い本能素質を持っているときには、去勢不安に脅かされると、母を愛して父と競争するよりは、みずから進んで父への敵意や男性らしさを放棄し、母と同一化することによって父に愛されようとする退行的な口愛願望を強く持つようになり、男性性は失われて同性愛傾向が強まっていく。

葉蔵は陰性エディプス・コンプレックスを経験したのではないか。父に愛着したからこそ、葉蔵には母に対する想いがなかったのだろう。特に男性にとつて「懐しい」存在は母親となるはずだが、葉蔵が「恐ろしい」と思いながらも父を「懐しい」存在だと言ったのは、葉蔵が父に「愛」を感じていたからなのだ。すると、父への強い執着も理解できる。では、葉蔵が本当に陰性エディプス・コンプレックスを経験したとすると、父に愛着し、父に愛されるために母と同一化して女性性を身につけていくことになる。葉蔵は本当に女性性を身につけていったのだろうか。

2 葉蔵のセクシュアリティ

葉蔵は、陰性のエディプス・コンプレックスの解消をしていたのだろうか。葉蔵の女性性について検証してみよう。

まず、家長制社会におけるステレオタイプの人男らしさ・女らしさの二項対立の表を挙げる。⁽⁵⁾

男らしさ	支配的・攻撃的・独立的・理性的・能動的
女らしさ	従順・優しい・自信がない・感情的・受動的

このように見てみると、葉蔵には「男らしさ」の要素がまったく無いことがわかる。一方、葉蔵の「女らしさ」の要素はどうなっているのか。

「いや、もう要らない」

実に、珍しい事でした。すずめられて、それを拒否したのは、自分のそれまでの生涯に於いて、その時ただ一度、といっても過言でないくらいなのです。

と、拒否することをせず常に人に従順だった葉蔵。

つつましい幸福。いい親子。幸福を、ああ、もし神様が、自分のような者の祈りでも聞いてくれるなら、いちどだけ、生涯にいちどだけでいい、祈る。

と、ツツ子・シゲ子親子の幸福を心から祈る優しい葉蔵。

人間に対して、いつも恐怖に震いおののき、また、人間として自分の言動に、みじんも自信を持てず、：

と、人間として自信がない葉蔵。

めそめそ泣いてばかりいました。／＼おいおい声を放って泣きまじした。／＼自分はぼろぼろ涙を流し、：

と、悲しいことがあるといつも涙を流す感情的な葉蔵。

「惚れられる」／＼「好かれる」／＼「かまわれる」／＼「犯される」

と、常に「…れる」「…られる」という「受け身」のかたちで他者と

つながりを持つていた葉蔵。特に男性が女性を支配する家父長制社会において、男性からの働きかけだけに「受け身」になるのではなく、女性にも「惚れられ」「かまわれ」「犯される」という「受け身」のかたちでつながりを持つ葉蔵には、もはや男性性のかけらもない。

また、葉蔵は人々を笑わせる道化となつていったわけだが、幼い頃、葉蔵は「出鱈目の曲に合わせて、インデヤンの踊りを踊つて見せて、皆を大笑いさせ」たことがある。その時、次兄の撮った写真

に葉蔵の「腰布の合わせ目から、小さいおチンポが見えていた」ので、これがまた家中の大笑いになった。葉蔵は道化者として成功したというわけだ。この部分は我々読者にも笑いを誘う所だが、葉蔵のセクシュアリティを念頭に置くと、葉蔵は「男性器」男性としての象徴までも道化、笑いの道具にしてしまっていることに気づく。男性性のシンボルを道化や笑いに利用しているこの部分には、葉蔵の男性性の放棄が現れている。

以上のように、葉蔵は女性性を持った男だった。葉蔵は陰性エディプス・コンプレックスを経験したのだと言える。また、葉蔵に女性性が備わったのはこの陰性エディプス・コンプレックスによるものだが、それに加えて、

自分の家族は、女性のほうが男性よりも数が多く、また親戚にも、女の子がたくさんあり、一中略―自分は幼い時から、女とばかり遊んで育った

とあるように、葉蔵は幼児期に女性性につきやすい環境だった

のだ。父がよく留守をしていたことで、家庭の中の男性性モデル不在も要因となっているだろう。

また、葉蔵は「幼少の」頃から「女中や下男から、悲しい事を教えられ、犯されてい」たとも言ふ。女中や下男から肉体的ないたづらをされることによって、葉蔵の性は否定的に意識させられ、セクシュアリティまでもいたずらされてしまったのだ。

家父長制社会におけるセクシュアリティは、男性の女性への能動的欲望が正常な、自然的欲望とみなされ、それに従属する限りでの能動的快楽が女性のセクシュアリティとみなされている。つまり、 \wedge 能動 \parallel 男 \wedge 受動 \parallel 女 \wedge という欲望のコードが正常とされ、逆転したコードは異常とされてきた。そしてこのコードが家父長制社会の異性愛体制を支えている。

葉蔵は受動的な男である。父を愛し、母のような女性性を身につけることによって父に愛されたいと望む同性愛感情を抱いている。すなわち家父長制社会において異常とされるセクシュアリティを持っていたのだ。

「葉蔵は父に同性愛的感情を持っていると言いが、多くの女性と關係を持ったではないか」と指摘を受けるかもしれない。しかし、葉蔵は男でありながら女性に対しての能動的欲望はなく、女性からの働きかけを「れいの受け身の奉仕の精神」によって受け入れていただけだったのだ。うわべは女性と關係を持つことで異性愛体制をとっていくが、葉蔵の本心は「実に、薄水を踏む思い」で「女の人たちと附合ってきた」のだった。「時たま、虎の尾を踏む失敗をし

て、ひどい痛手を負い……」という、女性との付き合いについての告白もある。女性と付き合えば付き合うほど父の存在が離れてしまった「痛手」を言っていたのだろう（ツネ子と情死事件を起こしたことで父の怒りを買ひ、シツ子と同棲することで故郷 \parallel 父と絶縁することになってしまった）。シツ子と安定した生活を送りながらもやはり父への想いは消えることなく、「ふいと故郷の家が思い出され、——中略——うつむいて涙をこぼした」葉蔵であった。また、シツ子の娘のシゲ子との会話の中でも「親の言いつけに、そむいたから」と、常に葉蔵の胸中には父の存在があったのだ。

ただ、葉蔵は一度だけ「能動的な男」になったことがある。それは葉蔵が父と離れてみて様々なことを経験するうちに「世間」が「ぼんやりとわかりかけて来た」時だった。その頃出会った「処女」のヨシ子なら倒錯したセクシュアリティを持つ自分も能動的な男になることができ、「いまにだんだん人間らしいものになることが出来る」のではないかと、葉蔵は初めて能動的に女に働きかけ、家父長制社会の男になる「一本勝負」に挑んだのだ。しかし、他人にヨシ子を「汚された」ことで葉蔵に芽生えかけた男性性は否定されてしまった（葉蔵の芽生えかけた男性性はヨシ子の「処女性」があつてこそそのものだった）。結局葉蔵は男になれず、葉つげの毎日を送り、自殺未遂を起こした葉蔵は思わず「僕は、女のいないところに行くんだ」と言ってしまう。これは葉蔵の「自分の人生にとつて、もう女はいらないのだ」という無意識からの言葉だったのだろう。そしてこの「地獄からのがれる最後の手段」として葉蔵は「故

郷の父宛てに長い手紙を書いた。これは「もう自分を救えるのは父しかいない、自分は父しか求めていない」という、まさに父に「愛情」を求める「最後の手段」だったのだ。

以上のように、多くの女性と関係を持った葉蔵だが、常に父が胸中にあり、愛し、また愛を求めていたのだった。そして最終的に葉蔵を救えるのは、父の愛しかなかったのだ。

女性性を身につけ父に愛されようとした葉蔵。しかし、愛する父は、父親として息子である葉蔵が家父長制社会における立派な男になることを望んでいる。そこに葉蔵のジレンマが生まれ、「苦悩」し続けたのである。しかし、息子が立派な男になることを望むのは葉蔵の父一人の独断というわけではなく、家父長制社会では男は「男らしく」、女は「女らしく」なっていくのが自然である。男だが女性性を持つ葉蔵には、父をはじめとする家父長制社会全体も理解することができず、そこに、そんな社会への「恐怖」や「不信」が生まれ、

つまり自分には、人間の営みというものが未だに何もわかっていない、と言う事になりそうです。自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安、自分はその不安のために夜々、転輾し、呻吟し、発狂しかけた事さえあります。

とか、

また自分は、肉親たちに何か言われて、口応えした事はいちども有りませんでした。——中略——そのおごごそこそ、謂わば万世一系の人間の「真理」とかいうものに違いない、自分にはそ

の真理を行う力が無いのだから、もはや人間と一緒に住めないのではないかしら、と思ひ込んでしまふのです。——中略——自分がひどい思い違いをしているような気がして来て、

という「苦悩」の叫びを発していたのだった。△自分の幸福の観念△父に愛されること△と△父をはじめとする△世のすべての人の幸福の観念△息子には「男らしく」育ってほしい△とのズレや、△人間の「真理」△男は「男らしく」、女は「女らしく」に對してそのように出来ない自分は「ひどい思い違い」をしているのではないか、という「不安」に葉蔵は苛まれていた。つまり、葉蔵の「苦悩」は、家父長制社会におけるセクシュアリティのあり方と葉蔵のセクシュアリティのあり方とのズレにあったのだ。『人間失格』は、倒錯したセクシュアリティを持ってしまったゆえの悲劇なのである。

3 葉蔵と「道化」

倒錯したセクシュアリティを持った葉蔵は、「人間を極度に恐れているが、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかった」。このどうしても思い切れなかった要因は、葉蔵の父への想い、つまり「愛情」があったためである。葉蔵が「そこで考え出したのは、道化」だった。葉蔵は「この道化の一線でもわずかに人間とつながることが出来たのです」と言う。葉蔵の「人間に對する最後の求愛だった」という道化。この「道化」にはどんな意味が込められていたのだろうか。葉蔵にとっての道化の意味を考えてみたい。道化とは、「人を笑わせるような、おどけた言葉や動作をするこ

と、またそれをする⁽⁶⁾である。なぜこのようなあえて人を笑わせたりする行為があるのだろうか。道化の意味を探ってみる。

道化は古くから世界中に存在していた。その多くの道化を整理と區別し定義するのは不可能だが、道化を典型的に示しているのは儀礼の道化だとされる。山口昌男は道化を次のように説明する。⁽⁷⁾

儀礼に登場する「道化」は、文化的秩序の中心としての「主役」が表す儀礼的莊嚴さや社会的価値をからかって、入り乱れ、騒ぐ働きを演じ、主役たちを退場させる。すると道化たちは、大食いや糞尿を飲むまね、あるいは性交のまねをしたり、観客をからかって笑いを誘い、聖なる中心としての広場を我が物顔でかきまわし、非日常的・反社会的な場にしてしまう。しかし、主役たちは武器を持って再登場して道化たちを退治し、追い払う。こうして主役たちは、広場を聖なる中心へと戻すのだ。

このように道化が日常世界を脅かすのは、禁制の侵犯などの異化的演技によって、慣習化された世界・固定化された世界から人々を解き放つて、自由で新しい想像力の回路の形成のために、世界を構築し直すためなのである。だから、道化には禁制（糞尿を飲む・人前で性交をする e. t. c.）の侵犯はつきものなのだ。一般に道化は、日常／非日常、中心／周縁、男／女など、二項対立の境界をくぐり抜けるトリックスターのように異なる世界を媒介できるので、最も深奥なる聖域にもずかずかと足を踏み入れることができるし、最も聖なるものを穢すこともできる。

道化の特徴・性格をまとめてみる。道化とは、

① 固定的な秩序へのおどけた批判者で、思考の枠組みの解体者である。

② トリックスター的で境界をくぐり抜け、異なる世界を媒介する。

（日常／非日常、中心／周縁などの二項対立を媒介することから、男／女の境界をも行き来するものとして「両性具有性」を持つとされる。）

③ 禁制の侵犯者として反社会性や悪を担って追放される「スケープゴート」的役割を持つ。そして道化の行為とは、文化がみずからの硬直を防ぐための知恵だったのである。

葉蔵にとって道化とは、「わずかに人間につながる」ための「最後の求愛」だったと言う。葉蔵は人を笑わせることで自分が「彼等（世間の人たち 引用者注）の『生活』の外にいても、あまりそれを気にしない」でいてほしいと願っていた。

葉蔵は女性性を持ち、父という男を愛する。この家父長制社会においては異常とされる、つまり倒錯したセクシュアリティを備えた人間である。葉蔵は道化で人を笑わせることによって、そのセクシュアリティを倒錯したものと見せないようにしていたのではない。特に父には女性性があることは絶対にごまかさなければならなかった。父は葉蔵が家父長制社会における立派な男になることを望んでいたし、父親は自分の息子が「女らしさ」を持つことに非常に否定的だからである。人々に「必死のお道化のサーヴィス」をし、自分を「無だ、風だ、空だ」として、葉蔵は倒錯したセクシュアリ

ティから人々の目をそらしたのである。そうすることで、葉蔵は理解できず恐れながらも家父長制社会でなんとか生きていけたのだ。では、葉蔵にとつての道化は倒錯したセクシュアリティを隠すだけのものだったのだろうか。道化には両性具有性や禁制の侵犯という特徴があることは先に述べた通りである。葉蔵は男でありながら女性性を持つ、まさに両性具有である。また禁制の中でどの社会でも最も厳格に守られるのは近親相姦の禁忌とされている。が、葉蔵は父を愛し、愛されたいという近親相姦的願望を持っている。つまり、葉蔵は最たる禁制を犯していた。しかし、道化となることによつて葉蔵の両性具有性や近親相姦(願望)は肯定される。つまり、葉蔵は道化の道を選ぶことで、自分の倒錯したセクシュアリティを密かに肯定しようとしていたのだ。

道化は、その境界性や禁制の侵犯という日常からの異化によつて、固定的な秩序や思考を批判し、解体し、自由で新しい世界を構築させるためのものである。葉蔵には「世の中の合法」というものが不可解に思われて、非合法活動をしたことがある。葉蔵は秩序ある合法社会の批判者であった。非合法という、ある意味で「自由な」世界に憧れていた。このことは道化の目的と通じている。葉蔵は道化によつて、固定化された家父長制社会を解体し、倒錯したセクシュアリティを持つ自分でも自信を持って生きていける、自由で新しい世界を構築したかったのではないだろうか。

しかし、葉蔵の必死の道化は強大な家父長制社会にとつては、結局一人のちっぽけな道化でしかなかった。世界を変えることは出来

なかった。最後は反社会性・悪を担うスケープゴートとして秩序によつて追放される道化。同様に、道化の葉蔵は秩序ある「世間」の代表ともいふべき堀木やヒラメによつて、倒錯したセクシュアリティを持った「狂人」として脳病院に入れられ、「世間」から追放されたのだった。

「人間に対する最後の求愛」の手段として道化を選んだ葉蔵。道化は葉蔵のセクシュアリティの病を肯定はしてくれただが、道化ゆえに最後は秩序Ⅱ家父長制社会から追放される運命だったのである。

人間、失格。

もはや、自分は、完全に、人間ではなくなりました。

結

葉蔵に当てはまらなかった(△能動Ⅱ男/受動Ⅱ女▽)のセクシュアリティのコード。一般にこれが正常、自然とされてきたわけだが、セクシュアリティ自体決して自然的なものではなく、社会的・文化的に構成されたものだということ忘れてはならない。ごく私的領域とされるセクシュアリティにまで家父長制という男性の権力支配が貫通してしまっていることは、葉蔵の「苦悩」によつても明らかだと思ふ。しかし、葉蔵が「人間」として生きた時代にはまだセクシュアリティが「つくられたもの」という觀念はなく、葉蔵はセクシュアリティの病を背負った者として「苦悩」を抱えて生きていかなければならなかったのだ。

最後に、セクシュアリティの仕組みが明かされてきた現在、「病」

にかかっていた葉蔵に次の二人の言葉を贈り、私の『人間失格』論の結びとしたい。

「男」と「女」はこれまで言語の中にしか存在したことはない。あらゆる語る存在はこの性区分の一方の側か、もう一方の側に結集するほかないのだが、だれもがその境界を越えて、解剖学的に定められている性とは反対の側に自らを刻印することができなのだ。

—— ジャック・ラカン

もし、女性的なものと男性的なものを決定し、整然と階層化された両極性としての性的対立を保証しているのがただの衣装にすぎないとしたら、つまり社会的な記号・制度にすぎないとしたらどうだろう。もし本当に衣装が男性を、また女性を作るのだとしたら、そのようなものとしての性差は、本来的に変装にすぎないのではないか。性的役割とは、真のセクシュアリティの、真の性差の、あいまいな複雑さを模倣した茶番劇にすぎないのではないか。

—— ショシャナ・フェルマン

注

(1) 東郷氏は「母」の欠落と「父」への恐怖」とをこの作品の骨格の一つとした上で、次のように述べる。

人が最初に出会う他人は「父」である。「父」は「合法」的外界の秩序を代表する存在として息子に底知れぬ「恐怖」を与えると同時に、ほかならぬ血を分け与えたものであることによって、「懐し」

(2) い存在であるという背反する二面性を持つ。(『人間失格』の渴望) 東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』双文社(一九七四年所収) 鶴谷氏は、「が具体的に語られている箇所から「父」の意味するもの」を、次のように考察する。

(「父」は) 葉蔵の人生を鋳型にはめこもうとし、(画家)志望に象徴される主体性の確立という芽をつみとった点では(父)おそろしく、(父)悪い存在である。けれども最終的に依存するところも(父)であり、それは葉蔵の(甘え)という形にあらわれている。

また、葉蔵の(人間)への恐怖心が(やけ)に重く、(父)の死によって(張合い)が抜け(た)という告白は次のことを裏返しに物語るものである。すなわち、不安と恐怖心とにさいなまれつつきてきた葉蔵からみれば、ある意味で(父)は妬ましいまでに自信を秘めた(実生活)上の達人と映っていたに違いないと。(人間失格) (父)の意味するものを中心に、『太宰治論 充溢と欠如』有精堂一九九五年所収)

(3) デビッド・B・リン『父親—その役割と子供の発達』(今井信人はか共訳 北大路書房 一九八六年)

(4) 小此木教吾『フロイト』(講談社学術文庫 一九八九年)

(5) 注(3)参照

(6) 西尾実ほか編『岩波国語辞典』(第四版 一九八六年)による

(7) 山口昌男『道化の民俗学』(ちくま学芸文庫 一九九三年)

(8) 武田美保子ほか『読むことのポリフォニー・フェミニズム批評の現在』(ユニテ 一九九二年)

付記 『人間失格』のテキストは新潮文庫版(一九九五年 百三十一刷)による。

(いしはら・くみこ 成城大学文学部卒業)